

## 2011年度 第2回特別講義 レポート

日時	2011年6月17日(金) 10:00~12:00
会場	(財)日本科学技術連盟・東高円寺ビル 2階講堂
テーマ	「SQuBOKガイド(ソフトウェア品質知識体系ガイド)の概要と活用のポイント」
講師名・所属	町田 欣史氏 (株式会社 NTT データ)
司会	第5分科会 テスト 副主査 秋山 浩一氏 (富士ゼロックス株式会社)
アジェンダ	<ol style="list-style-type: none"><li>1. SQuBOKガイドの概要</li><li>2. SQuBOKガイドの特徴</li><li>3. SQuBOKガイド活用のポイント</li><li>4. まとめ</li></ol>
アブストラクト	2007年に日本発のソフトウェア品質知識体系ガイドであるSQuBOK(R)ガイドが公開された。SQuBOK(R)ガイドは、ソフトウェア品質に関する古今東西のノウハウが凝縮、整理され、ソフトウェア技術者必携の書であると言える。本講義では、SQuBOK(R)ガイドの特長を11個にまとめて紹介するとともに、様々な立場の方がどのようにSQuBOK(R)ガイドを利用すればよいかについても言及する。本講演の内容を参考に、多くの皆様にSQuBOK(R)を有効に活用していただきたいと思っている。
<b>&lt;講義の要約&gt;</b>  <b>◆ SQuBOKガイドの概要</b> BOK(知識体系)とは、ある専門領域の知識の総和であり、「SQuBOK(Software Quality Body of Knowledge)」とは、ソフトウェア品質に関わる実務者や研究者が有する知識体系である。 情報共有されず未整理であった知識を体系的に整理し、構造化、可視化したものが、SQuBOKガイドである。 SQuBOKガイド策定の目的は、人材育成やソフトウェア品質技術の認知度向上などがある。 SQuBOKガイドの知識構造は、「ソフトウェア品質の基本概念」「ソフトウェア品質マネジメント」「ソフトウェア品質技術」という、3つのカテゴリから構成されている。 また各カテゴリは、その下に副カテゴリ、知識領域、副知識領域、トピックスを持つ5階層の構成になっている。 ソフトウェア品質マネジメントとソフトウェア品質技術とで対応付けを行うなど、より読みやすく、わかりやすくするための工夫も行っている。	

※第一版では、設計、実装はスコープ外となっているが、現在第二版改訂へ向けて活動を進めている。

#### ◆SQuBOK ガイドの特徴

11 の特徴を紹介。

(1) SQuBOK は、「日本発」の知識体系

アメリカ・ドイツ・中国など、世界にも紹介している。特に中国で展開。中国語版の作成が今準備中。

(2) 多くの参考文献へのポイントとなっている

SQuBOK だけでも 300 ページ以上の書籍だが、参考文献・企画・表彰された論文を紹介している。

(3) 古いものから最新のものまで幅広く取り上げている

古典的なものも依然として有効である。

(4) 海外の情報も数多く取り上げている

品質マネジメントについては日本の情報が 6 割。日本の得意分野。

(5) 一流企業の実績ある技術を紹介

どこの企業で扱われているか、も明記されている。

事例ベースで、ある程度やりかたがわかるようになっている。

(6) 複数の異なる定義を掲載

同じ用語でも人によって解釈が違う。捉え方によって意味が違ってくる。

担当者内で合意、あるいはお客様と合意するときに、目指すところはこういうところだ、というのを定義するのに活用してみてもどうか。

(7) 規格の概要を容易に確認可能

まずは SQuBOK ガイドで確認してみる、ということができる。

(8) PMBOK や SWEBOK のソフトウェア品質に関する要素を抽出

「PMBOK (Project Management Body of Knowledge)」や「SWEBOK (Software Engineering Body of Knowledge)」を尊重しつつ、

対応しながらつくった。双方を見るとき混乱しないようにまとめた。

(9) 読者の皆様のご意見を反映して進めていく

SQuBOK ユーザ会というのがある。活動は ML ベース。気軽に参加いただきたい。

(10) 資格試験がある

JCSQE

(11) 日本的品質管理の特徴が垣間見える

#### ◆SQuBOK ガイド活用のポイント

SQuBOK ガイドを、どう使えばよいのか？効果的な使い方を、ロールごとに紹介。

本当は全体を理解するのが望ましいが、まずは自分の担当する工程や関連領域から学び始める。

マネージャ:(プロマネ・品質管理マネージャ)

工程や領域を学んでから、対応する技術を学ぶ。

開発者:

個別のプロジェクトレベルから、対応するマネジメントを選ぶ。該当する技術を学ぶ。

標準化・改善の推進者:

まずは組織としてすべきことを学び、

その後、品質保証の考え方、改善の考え方を学ぶ。基本に立ち返る。

あるいはマネジメントや技術を確認。

ユーザ:

品質はお客様の満足を満たす。ではお客様はどのような品質を要求しているのか？

要求する品質を確認し、プロダクトやプロセスの品質の作り込みや確認について学ぶ。

新人・若手:

辞書代わりにつかってもらう。

知識を知っている、あるいは説明できる、というレベルを目指す。

実際、新人研修でわからない用語について調べさせている。

読んで意味を知るだけでは理解できないので、更に参考文献を読んでみる。

中堅社員:

キャリアパスの実現に活用。

今やっていることをより深く理解していく。あるいは、新しい分野、更に広げる。

ベテラン

見直し、新たなチャレンジに利用。

組織やプロジェクトの独自スタイルに慣れているため、考えややりかたが固まっている傾向があ

る。

あらためて基本に立ち返るのがよい。基本はおろそかにしない。

#### ◆まとめ

SQuBOK ガイドは継続的に発展していく！

開発現場で活用していくことで、「知識」から「知恵」に変わっていく。

それらの知恵や実践結果を SQuBOK ガイドにフィードバックしてほしい。

SQuBOK を海外へ発信していきたい。ソフトウェア産業を成長させていきたい。

#### <講義の感想>

SQuBOK ガイドを読んだだけでは業務に使えるようにならない、という言葉は全くそのとおりであり、業務の中で活用していくためのポイントをロールごとに解説してくださったことで、非常に身近なものになったと感じました。